やまちゃんの

地図からコラム　2

　地図からコラムの書き手”やまちゃん”です。

　ある日あるときから、あるメールマガジンに地図をつなぎ手として、コラムを担当することになりましたといいながら、小咄というかエッセイというか得体の知れないものを掲載しました。

　これは、そのときの「地図からコラム」に多少の手を入れたものです。

　ところで、自分のことは分かっているようで、分からないものですが、自身では“シャイ”で、“小心者”で、それから、うーーんと？？しだいに分かるでしょう。年齢は、今でも少年の気持ちを維持していますが、脱脂粉乳の味を記憶している”やまちゃん”です。

目　　次

1.　「夏休みには、お助けします」
2.　「命名は楽しいもの」
3.　「雪原で迷って、かなづち」
4.　「傘がないと活力が出る」
5.　「占領された地図　１」
6.　「占領された地図　２」
7.　「文化を乗り越えられない夫婦」
8.　「『地名審議会』を作ろう」
9.　「えせ編集者は、地図を作る」
10.　「『〇〇平』・『〇兵衛』はいませんか」
11.　「『〇〇平』・『〇兵衛』はいませんか　２」
12.　「ふるさとを思う」
13.　「私の書斎から」
14.　『脳の地図』へは書かない
15.　「順天高校のこと」
16.　「連鎖の書の地図から」
17.　「終わりの始まり」
18.　「中越の人々に助けられて」
19.　「黄昏色染まってしまう地図」
20.　「よみがえれ山古志村」

「夏休みには、お助けします」

お盆前後の閑散とした電車の冷房は、老人の体に優しくない。目盛り位置は同じでも、この混雑具合では効果の程度が異なる。

普段なら、席にゆっくり腰をおろすことも少ない車内で、熟睡でもするものなら、永久に呼吸停止？、とはならないまでも、夏風邪をもらうことは必至である。

同じように、車内のボリュームもかなり異なる。乗客の体重のことではない、車内の話し声のそれである。普段は、ほとんど見かけない家族連れがあちこちにいて、朝の通勤時間帯なのに、話し声が聞こえるのは、健全である。

そうした家族連れや外国人の旅行客が、都心のホームで電車の路線図を覗き込む姿もしばしば目にする。お節介好きの“やまちゃん”内心では声をかけたいのだが、躊躇する。というか、件の人に目をやりつつも素通りする。

イベントなどの開催時には、案内窓口が開かれることがあるが、これは待ちの姿勢でよくない。この時期には、お節介好きの「地理案内人」が、地図や時刻表を片手に、いやもっと声を掛けやすい身なりでふらふらするというのが理想的である。

鉄道マニアは多いから、自選他薦の「地理案内人」はすぐ集まると思うのだが、それこそ、お節介というものか！

「命名は楽しいもの」

“やまちゃん”には、孫が三人いる。でも、そのことについて、書きとめたことはない。

これが、初出ということになる。名は順に、「ゆの」、「こうすけ」、「あすま」である。親が子につける名前は、時代を反映している。太平洋戦争の最中には勇ましい名が幅を利かし、戦争が終わると平和や平穏をうかがわせるものが多くなる。

現在はどうなのかというと、男の子なら「翔」「大輝」、女の子は「未来」「さくら」が上位らしい。感想としては、自由闊達あるいは、中性化ということのようでもある。

さて、輝かしい将来が期待される子どもに名をつけることは、楽しい作業であるし、楽しい作業でなくてはならない。

他方、市町村合併に際しての行政名の命名作業は楽しそうに見えない。何故だろうか。

合併後の輝かしい将来は同じだとしても、既にある名前で育ってきた経緯というものがあり、複数のものを一つにするという煩わしさもある。人名以上に永く広く使用されるとうこともある。

さらに、命名に口を出す人が、両親のほかは祖父母程度といった少数ではないという問題もある。

過去には、足して 2 で割る式の命名も多くあったが、今は広がりとの関連で当り障りのない地方名（それも最近作ったというような）といったものが多い。

“やまちゃん”には、歴史的地名を守ろうな

どといった、大それた意見はないが、この作業
を楽しいことにしたいものと思っても見る。

「雪原で迷って、かなづち」

春の一時期、健康診断があちこちで行なわれる。健康診断専門の診療所があるようだが、他の季節は何を糧にしているのだろうかなどと、いらぬ心配をしてしまう。

“やまちゃん”には、そんなことは、どうでも良くて、診断の結果は、概ね「A」なのだが、慢性の胃炎とやや肥満が気になる。

胃炎は、ストレスだから仕事が原因としておけば家族円満というものである。肥満は、運動不足が原因である。

解消のためには、スポーツジムなどでひと汗かけばよいのだが、“やまちゃん”は躊躇する。原因は、カナヅチだから。

そのまた原因は、雪原で迷ったからである。

雪国では、春の一時期、雪原一体を自由に歩くことができる。積み重なった固雪は、急傾斜も湿地も、長靴ひとつで歩行を可能にした。

探検家気取りで、野山を闊歩していたある日のこと、足を踏み外したと思った瞬間、体は水中にあった。記憶の中に、オーバレイの下の明確な地図はなかった。たとえ、それに「井戸」が記入されていたとしても、雪原レイヤと地形レイヤの関連づけは明らかでないだろう。

「あっ」と思った瞬間から、青くさい藻の臭いを体中で感じながら水中をもがいていた。四角い古井戸の木枠に手が届くまでどのくらいかかったのだろうか、とにかく無事に水からはい上がって、家路を急いだ。

あの腐ったような「藻のにおい」は、いつまでもはっきりと記憶にあって、それっきり「か

なづち」のままである。
　だから、「やや肥満」・・・、と言い訳している。

「傘がないと活力が出る」

脱脂粉乳のころ、人々は貧しかった。

断定することはできないのだろうが、少なくても、私の周辺はそうだった。年長者が、そのときの様子を人前で自慢下に話すことに嫌悪感を持っていたが、今となっては、そのタガも外れてしまったようだ。

雨が降ると、差してゆく傘も長靴も満足になかった。子どもの数だけの傘など何処の家でも揃っていなかったのだから不思議である。

で、どうしたのというと。

子どもたちは、複数人で１本の傘を利用した。ひびきの良い言葉なら相合傘とでもいうのだろうが、三人で利用したとなると、笑い話にもならない。

ロンドンの雨ではないが、北国では強い雨は少ないから、雨にも負けず走って行くというのが、本当のところである。

“やまちゃん”、このころの名残で、今でも霧雨に濡れることを快感にしている。

ところが、その後の高度成長は、この「満足でない」ということを、活力としたものだから不思議なものである。

となると、今の世に蔓延している、満腹感は成長の力にならないことになるが、ことはそう簡単ではない。簡潔にいってしまえば、量と質の満腹感があるということ。

人々は、多様な質を求めて止まない。

それは、自分だけにデザインされた洋服といったものである。

どこかで、自分だけの地図といったものが求

められているのだろうか。それに、答えている
のだろうか。

「占領された地図　１」

夏に一時期は、広島・長崎の原爆記念日、甲子園野球、終戦記念日と続き、いやでも太平洋戦争のことに思いを馳せることになる。いや、そのことを忘れてはならない。

“やまちゃん”も地図との関連で、何がしかのことを伝えておくことにする。

太平洋戦争末期アメリカは、日本の制空権を確保し、各地の空中写真の撮影を開始した。

それ以前、日本の地図や情報も収集していて、これらから本土作戦用の地図を作成した。

もちろん日本もそれ以前、展開を考えていた東南アジア各地の、いやそれよりももっと広範な地域の地図を収集し、一部では測量調査を行い、外邦図といわれる外地の地図を作成し、戦時作戦用に使用した。

その点では、アメリカ軍に引けをとらない。

ところが、この戦争が終わったとき、国内の地図事情はどうなっていたかというと。早くからの外地への展開で、維持管理が十分行われていなかった。アメリカ軍の地図が、写真測量によったものであったこともあり、現地に一歩も足を入れていない地図の方がはるかに優れていた。

最も、戦災の影響で、各地の地図を焼け野原として表現する作業は残っていたかもしれない。

そのとき陸地測量部は、疎開先の長野県波田村から、地理調査所という名前でデビューする。名前は体を現すようにと工夫して、軍から切り離されて存続するのだが。実際はそう甘くない。

平和時の地図測量を目指し、解体を逃れたものの、待っていたのは駐留米軍からの指令作業であった。

「占領された地図　２」

ご存知のように、日本に進駐したアメリカ軍は、占領地日本全土の空中写真撮影を開始する。並行して地図作成に重要な三角点の調査と空中写真上への明示（「刺針」という）作業が、軍事とは切り離されたはずの地理調査所に指令された。

蛇足だが、既存の地図や基準点が今後の地図作成に使用可能かどうかの調査を十分に行い、後続作業を開始する手順は、その後の ODA などによる後進国での地図作成にも用いられてきた。

さらに、それまで日本が統治していた、マーシャル群島などでの同様の作業が指令され、元陸地測量部の技術者は、はからずも外地に出かけることになった。

本土に戻って。例の 1/40,000 の空中写真と調査した基準点の情報を基に、日米共同で 1/50,000 地形図を作成することとなる（昭和 34 年協定）。日本側の担当は、もちろん地理調査所、アメリカ側は陸軍極東地理局である。資金は、アメリカが日本に提供した余剰農産物の代金（ガリオア・エロア資金）の一部をもって当てるというものであった。

地形図に関して、日米共通に使えるものとはいっても、ローマ字入りのアメリカ仕様であって、それも軍事用を意識した１㎞グリッドが記入されていた。

これで、日本の地形図が、連綿と続いたドイツ式から一気にアメリカ色の強いものになった。

「地図が占領された」のである。

その後、日本の地形図は独自の仕様となったものの、この時の残滓が今でも見られると“やまちゃん”は思っている。

この作業は昭和39年まで続き、地図の戦後処理はやっと終わった。

「文化を乗り越えられない夫婦」

“やまちゃん”基本的に家事はしない。ある時期からそう決めている。

だからといって、一切しないということでもない。連れ合いが留守の時などは、鍋釜を洗い、シンクを磨くこともするし、決して家事が嫌いなわけではない。

本当のところは、家事に限ったことではなく、できるだけ夫婦共同作業をしないことにしているのだ。その理由は明確で、無駄な衝突を防ぐためである。

冷たいと言われるかもしれないが、“やまちゃん”は夫婦についてこう思っている。

「所詮夫婦は他人である、長い間一緒にくらしていて、分かり合ったつもりでも、成長期を異なる環境で育った者は、本質的には分かり合えない、譲り合えない文化を持っているもの」と。それでも、子供という“かすがい”が存在していたときには、破滅的なことにはならない自信があったが、夫婦二人の生活が再開されたころには、そのことに自信がもてなくなった。

読者には、「“やまちゃん”って、わからないい」といわれそうだが、距離こそ違え、日本人の一見勤勉そうな非効率な仕事ぶりを、フランス人が良く理解できないようなことと同値であって、本人は至極明快だと思っている。

距離の問題ではないが、妻の出身地は千葉県、“やまちゃん”は北海道である。

「『地名審議会』を作ろう」

「命名はたのしいもの」のところで、「歴史的地名を守ろうなどと、大それた意見はないが、この作業を楽しいことにしたいものと思っても見る。」と書いてしまってから、付け刃のように、いつか開いたことのある地名の本を開いてみた。

地図・測量をする者として、市町村合併に伴う、「地名の命名を楽しくするにはどうしたらよいだろうか」を考える前に、多少は改名に向かう姿勢と言うものについて考えてみたかったからである。

そこでの、注目すべき言葉のいくつかを拾ってみた。

「地名はその土地のイメージを表現し、古往今来形成しきった経過を温存する。このことは地名そのものが立派な歴史的もしくは文化的遺産であることを示している。」

「地名が醸し出す自然と心情によって形成される地域は、まさしく一つの“風土と文化の世界”である。これを“地名風土”といっても、・・・不自然ではない。」

「地名が国語の重要な構成要素である以上、地名問題はすなわち国語問題であり、国語の当面している諸問題から離れて論じることはできない。」（「地図と地名」山口恵一郎著　古今書院）

果たして、「地名の命名を楽しく」などと軽々しい発言はできなくなった。いっぱしの地名研究家になった気持ちで以下を提案する？

「安易な地名の改名や命名は、地名の持つ

“風土と文化”を無視するものである。合併に伴う地名の改名や命名にあたっては、『地名審議会』の論議をもってしよう」とかなんとか。

　ということで“やまちゃん”は、『地名審議会』の設立を願うものである。

「えせ編集者は、地図を作る」

まいどの昔語りで、恐縮しつつ。

“やまちゃん”ある時、小さな研究室といった部署のサブに配属になったことがあった。

どう転んでも研究者ではない、また研究者タイプでもない“やまちゃん”は、自分の役割について自分なりに考えた。

そのことに関しては、この職場は柔軟であった。

というか、B 型の“やまちゃん”、いつものように勝手に解釈していた節もある。ともかく、私の役割は、他の若い研究者が良い仕事ができるように目配りすることだと理解した。

また、研究が現在・将来の業務に役立つものとなるように配慮すること、そして、研究者の成果や行動が他の者に見えるようにすることだと考え行動したつもりだった。

後段のことについては、研究を知ってもらうために職場向けの柔らかな広報誌を編集し、配布した。

このことが、“やまちゃん”の遊び？の幅を増やすきっかけになったと思っている。

この広報誌は、かなりの好評を得て、そのうち職場外にも配布されることになった。当該部署を離れ、当誌はすぐに廃刊となったが、そのアイデアが、その後発行が始まり、今も続いている旧職場の所内全体のある広報誌へと引き継がれたと（勝手に）思っている。

今の職場で始めた、技術情報のメルマガは 4 年間で 500 号ほどになった。そして、ここでの拙いコラムも、HP の雑文もこの下地（ある意

味の、自分の地図作りのようなもの）にある。

「『〇〇平』・『〇兵衛』はいませんか　１」

転勤族の“やまちゃん”北海道を皮切りに、南は九州まで、これまで都合 10 回ほど転勤した。生まれてからこの方の引越しは、父親の転勤もあるから、１５回ほどにもなる。

そうした記憶をたどる旅は、いやな思い出を少なくしてくれるから楽しいものである。新婚のころの中央線沿線の６畳のアパート、子どもが生まれたころの泥濘の三多摩の団地、日常の買い物に苦労した“つくば”など思い出は尽きない。

中でも富山への転勤は、北海道へ旅立った先祖のルーツであったから因縁のようなものを感じて、感慨深いものがあった。

海や山にと家族とともに、それこそくまなく出かけた越中富山。そこは、厳密には母方と父方の両方の父母の郷になるのだが、いずれの地にも本家の墓を守る縁者が住まいしていて、遠い昔を振り返りながら墓参りをした。

住所以外に何の手がかりもないのに、どうして墓参りができたかというと、以下のようなことである。

所用があって母方の田舎の市役所を訪れたときのこと。

「実は、ここの地が、私たち家族のルーツなのです」と担当の課長さんに話すと。

「え、なんという名だがや」とでもいったのでしょう。

「祖父の名は、△△〇〇平です」

課長氏は「少々待っていられ」と席を立ち。

連れてきたのは「△△××平」という方でし

た。
　話を聞いてみると、なんとその者が、北海道へ渡った私の家の本家筋に当たる方だったという、簡単なことだった。
　「『平』が、ついていたもんでェー」との、課長氏のひとこと。
　「平」こそが、縁者を結ぶキーワードだったのである。が、我が家、いや私の兄弟縁者にも「平」は今いない。（つづく）

「『〇〇平』・『〇兵衛』はいませんか　２」

母方の郷は、前のようなことで、苦労せずにたどり着いた。ある休日に、件の「△△××平さん」のお宅を訪問し、坊主頭のような花崗岩一つの墓石に花を捧げた。その土に近い部分に小さく刻まれた「□平」が、更なる確証をくれた。

この経験をもとに、父親のルーツは、より簡単に見つけられた。

今回も仕事で訪れた役場で、同じように話すと。「うーん、除籍謄本というものがあります。職権で取り寄せましょう」といって。１０分ほどで、祖父以前のそれを渡してくれた。

わたしたちは、これを手がかりに、電話帳をめくってびっくり。同住所に苗字が“やまちゃん”とあるリストが２０数件並んでいる。これに、片っ端から電話するわけにもいかず、現地に行ってみる。

苗字の“やまちゃん”以外に、何の当てのもない私たちは、表札に“やまちゃん”と書かれた一軒目の戸を開いた。

「私のおじいさんは『〇〇』、その親は『〇兵衛』の家を捜しています」というやいなや。

「『松兵衛』さんは、あそこだっちゃ」

それで、お終い。

目的の家とお墓、数分もしないうちに分かったのである。

前回同様、金ぴかの仏壇がある座敷に通され、もてなしを受けた。なげしの写真は、わが祖父母とのそれとは似つかないが、確かに「〇兵衛」本家。

こうして、無事墓参りをすましたというわけ。

「戸籍」というものの重要さを思い知らされた気がした。古い「地図」を使う人にも同じような思いをさせたいものだ。

「ふるさとを思う」

この夏の興味は、何といってもアテネであった。東京オリンピック以来の金メダルとか。女の強さを再認識したとか。

話題は尽きない。

しかし“やまちゃん”にとってのこの夏最大の話題は、高校野球である。

もちろん、駒大苫小牧によって、優勝旗が津軽海峡を渡ったという快挙は、準道産子の“やまちゃん”にとって、忘れられないことである。北海道の沈滞は、遠く離れても寂しいものがあった。拓銀以来のこの下降線を何とかしなければと、心の中だけのことではあるが、応援し、心にかけてもきた。

この後、新庄の日本ハムが優勝でもすれば、たとえスポーツから、それも野球だけのことでもあっても、大きな力になるだろう。

県別勢力図とか、民力図とかで表現すると、人口密度、失業率、離婚率、サービス産業比率、公共事業比率など、あまり芳しくないことでは上位を占める北海道。少なくても、高校野球の優勝を示す分布図では、色を塗られる。これで、北国だからという理由はなくなる。

これからは、広さと自然、農業と漁業、人情と自由さ、空気と水、星と風、ほかの地域ではすでに、ある一線を超えたこと、そして取り戻せそうもないものを武器に、打ち勝ってほしいものである。

“やまちゃん”、「お前が先に死んだら、ひとりで北海道に帰る」と千葉育ちの妻に言っている。

「私の書斎から」

“やまちゃん”書斎に入るとすぐに、鞄の中から「本日の書籍」を取り出す。

時々の「本日の書籍」は、行きつけの書店で求めた文庫本、近頃書きとめたものの素稿、キオスクで買い求めた経済紙、そして毎月送られてくる技術系の機関誌とバラエティに富んでいる。

その「本日の書籍」に目をやりながら、朝の小一時間を過ごす。この書斎での活動は、朝だけでなく夕方にも、ほぼ同じ時間を過ごす。時折目をやる窓の向こうには、黄色に色づいた稲穂や折り重なる家々の屋根が見えるが、ここ数日は、そこにもあまり視線を送らない。書きとめた月刊誌あての素稿と、出版を計画している小文の原稿の校正に忙しいから。

月末の１週間、私は行きつけの書店を度々訪れる。昼休みも、帰りがけにも。

愛読している“本の本”の何冊かが無償で店頭に並ぶから、見逃さずに受け取る。さりげなく店内を見回し、これもさりげなく手にとり、後ろめたそうに横目でレジを見ながらお代を払わずに店を出る。

この行きつけの書店で、本を購入したことがないわけではない。新刊案内の書と同様に、“本の本”を黙って持ち去ることは許されていることなのだが、定価の書かれた裏の１行が朱に塗られたこれを手にして、書店を出ることに、多少の後ろめたさが残る。

社会批評や対談が面白いＡ社のもの、連載が面白いＢ社のもの、あらすじが付加された連載

物がある C 社のもの、毎月 4 冊ほどを手にする。したがって、書斎での月末から月の初めは、これに占領される。

その後は、買い置きの文庫本や単行本が幅を利かす。合間には、校正をし、気が向けば経済紙を読む。しかし、この書斎では、発展というものがない。

本の道草は、楽しいものである。ある本を読んでいて、気に係ることについて辞書を捲る、関連した書を探す、気になる言葉をメモる、ということがここではできない。

辞書も、関連書も、メモるパソコンもないからだ。それは、ドラえもんの“どこでもドア”でもなければ、手に入らないし、それを利用するといつまでも会社にたどり着かない。

この書斎が手に入ったのは、2 年程前のこと、首都圏では長距離通勤とはいえない、1 時間半ばかりの通勤電車の中である。疲れたとき、時折目をやる先には、つり革に手を伸ばした OL がいる。

「『脳の地図』へは書かない」

“やまちゃん”お堅いことは大嫌いである。

仕事柄、「本日は、お忙しい中お集まりいただき・・・」などと口にしなければならないこともあるのだが、これが苦手である。

私が下手なあいさつを言うような会合に、「多忙をおしてまで出席する訳もなく。暇に任せて、あるいは仕方無しに参集したに違いない」などと、心から思ってしまう。

「・・・ということは、お忙しい中、来たということになるのかな？」

ともかく、その後に続く、普段口にしたことのないような「貴社におかれましては・・・」とか、「輝かしい業績のもと・・・」とか、「未来社会を担う人材として・・・」とか（うーん思い出したくもない言葉）、をいうのは、何事にも替えがたいくらい嫌いである。

会食やパーティというものも同じ、主催者側になど望まれても断る。

だからといって、大勢の人前に出るのが嫌いかというと、そうでもない。フツーの発言が要求されれば問題はない、思ってもいないこと、信じてもいないことをそれらしく言うのが嫌なのである。それも高い段の上からは。

アーそうそう、原稿どおり話すのも苦手である。

そうした堅苦しい場のためには、念入りに原稿を作るのだが、そのまま読みきったという記憶はない。それどころか、その紙切れをポケットにしまいこんだのだが、ついに発見できなかったことさえある。

高い段の上のときは、少々お酒を入れて、本心だけを話すという度胸もない。アーとか、ウーとか言いながら終わるのが通例である。

そんな、堅苦しい場の対極に近い会合があって（そんなに前置きをするほどのことはない、単なる飲み会）。T 大の若い先生を囲んで、お話することがあった。

若い先生であっても、教養溢れる新進の教授だから、年を召しているだけが勝っている“やまちゃん”には、対等に話ができない。あとは、酒にまかせて、相手は、「地図文化論」を語っても、こちとらは柳に風で、「昔語りのちずの話」終始する。

それでも小 1 時間ほど、文化を語って、会合は終わる。

この知識、どこへ書き込めばいいのかと思慮する。ひとつ書き込むと、ひとつ以上は消える干からびた「脳の地図」。

その「脳の地図」には。書かない方が良いとの結論に達して、一部を紙に残そうとするが、酔いから覚めると文化はひとつも残っていない。

「順天高校のこと」

休日のある日、都心の高等学校に向かった。

その高等学校は、創立 160 年強の歴史があって、国土地理院の前身である内務省測量課、陸地測量部などとの関わりを持っている。そのことを「測量」という測量技術者の機関誌で紹介するために取材訪問した。

国土地理院と同高校のことを、かいつまんで紹介する。

福田半の父は、同校の前身である数学と測量を教える順天求合社を設立・運営していた。

一方で、福田半自身も、時習義塾を設立していた。

そのとき半は、内務省測量局の職員でもあり、同塾設立の経緯は、日本の地図・測量技術者のレベルの低さを嘆いてというもの。しかも、職場の同僚を教授として迎えながらというもの。卒業生はというと、趣旨に沿って自らの勤務先である内務省測量局に送り込んだ。

ところが、確かな理由は分らないが、その副業的なことからだろうか、旧幕府フランス派と新政権ドイツ派の権力闘争からだろうか、確かな理由は分らないが、勤務先を辞して、塾をたたみ、学校をも譲って父子は大阪へ帰る。もちろん塾教授などの関係者も、あるものは辞し、あるものは処分され、自殺するものさえいた。

しかし、その後も同校は測量を教える学校として存続する。確かなことは分からないが、我が国で最初の測量専門学校であろう。

ある時期には、陸地測量部修技生徒となるための養成校としての生徒募集もする。

一方、内務省測量局などから再編された陸地測量部は、日清、日露戦争に際して臨時測図部を組織して、戦地地図作成を行なうことになる。そのとき、測量技術者をどこから調達するか悩んだに違いない。もちろん自前の研修施設、修技所を持ってはいたが緊急の用には立たなかったのか、正規の職員を大挙して戦地へ送り込むことに躊躇したのか。ともかく、臨時測図手として同校の生徒を数多く登用したのである。日清の際には 37 名、日露の際には 74 名、という多数である。

これらが、簡単な順天高校と国土地理院との関わりである。

その日は、遠い昔に結ばれた糸のお陰だろうか、快い会話と充実感のあと、「谷中せんべい」と、すこぶるお気に入りの「竹箸」を買い求めて帰宅した。

それも普段にはめったにしたこともない、店主へのひやかしの声もかけて。

「また買いに来ましたよー」

「連鎖の書の地図から」

通勤時間が長いことは、どこかでお話したとおりである。お陰で書店には、日を置かず通うことになるのだが、選定する本のジャンル、読書の範囲は辺りかまわずという風である。と、本人は思っているが、傍から見ると案外そうでもないかも知れない。ある場所には読書済みリストも用意しているから、その評価は、他人に任せよう。

さて、本選び手順は、タイトル、著者名、装丁、帯や裏表紙などのあらすじなど、ありきたりのことである。買い求めた後は、積読の習慣は無いから、早足であっても大抵のものは読みきってしまう。購入はしたが、どうしても読みたくないものにも、ごくまれに遭う。それは、不幸にもゴミ箱へ直行する。

そうして読み続ける小説の内容に一つの波があることを確認した。

現在の波は、（あえて、書名は紹介しないが）以下のようなものである。理屈立てて本を漁っているわけではないが、なぜか一つのものが見える。あるいは書に社会が投影されているのか、書が社会を見透かしているのかよく分からないが、「連鎖の書の地図」を描いてみると。

自堕落な生活から事件を起こし、死刑宣告を受けた死刑囚の目覚めと苦しみ→警察内部の不協和音と幼女誘拐事件、その裏には幼女誘拐と怪しげな宗教が、刑事の家庭を巻き込む→顔崩れても凛として生きる女とこのかた笑ったこともない生真面目な浪人の美しく悲劇的な生活→これまでの暮らしから脱出するため死

体解体を請け負う主婦たちのそれぞれ→横領金をもとに夜の生活に入り、そこに現れる汚れた紳士を獲物にして欲望を広げる女の結末・・・

　先ごろ死刑を休憩された人が、僅かな期間のうちに処刑されたことが話題になった。そして何よりも幼児虐待や女性がらみの事件が多発し、それも残虐なものが多い。同時に女性や年少者による犯罪が起き、警察官の不祥事も多いのは偶然か。

　そして、書が社会を映すことは当然として、かつて山本周五郎の世界を愛した男が、そこに多少の抵抗感やためらいを持ちながらも、こうした小説を読み続けることができる変化に不安を感じる。

「終わりの始まり」

何時の日からか、仕事の始まりは机上のパソコンの電源を入れ、メールを読むことから始まるようになった。

往復４時間にもなろうかという通勤時間を経て、帰宅早々の行動も同じ、自宅のコンピュータの電源を入れことから始まる。声を発するということがなくても、毎日他者と向き合うことに反比例して、身近にいる連れ合いとの会話時間が自然に少なくなる。

そのことでの不満の声が、それとなく聞こえるようになって、大いに反省し、注意を払ってはいるが、不満解消の名案は無い。

そんなある日のこと、定年予定者を対象とした説明会の案内が届いた。

注目の年金のことばかりではなく、定年後の生活についてもアドバイスしてくれるのだろうか。大きな会社では、かなり前から夫婦で参加して下さいというのもあると聞いているが、当社は社員だけの参加である。

早く自由な毎日を迎えたいと思ってはいたが、いざとなると「うーん、ついにきたか」という心境である。

同日だっただろうか、ともかくこれと相前後して、帰宅した食卓の上には珍しい故郷からの封書があった。懐かしさで開けた封筒の中には、還暦の同窓会の案内である。

長い人生の中で、事の終わりを経験することは数多くあっても、これまでには無かった感慨を持っている。それは、定年の、還暦の、通過点を知らされたことでスタートする、人生の終

わりの始まりという一大イベントである。

　この始まりは、連れ合いとの身近な時間が多くなることでもある。つかず離れず暮らす、新しい二人の職場に早く慣れなければと思いながら。“やまちゃん”は、今日もパソコンのスイッチを切ることで一日を終える。

「中越の人々に助けられて」

新潟県中越地震発生からいく日が経っただろうか。いつ終わるとも知れない余震と、遅々とした災害復旧に、地元被災者の方々は、苛立ちの毎日であろう。

そうした体育館などに見える被災者の姿と、伝えられてくる被災者の方言に、ある日優しく暖かく接してくれた越後の人々を思い出した。

そして、僅かな寄付のほか何もしない自分に、何がしかのやるせなさを持ちながら、たった一枚の見舞い葉書を越後へ送った。

私がこの地域とそこでの人々と係わりを持ったのは、1980 年から始まった富山勤務がきっかけである。勿論のこと、公務としての地図作成がつなぎ手である。地元自治体の方々とともに、新潟県の主要都市や地域で大縮尺の地形図を作成したと思っている。地元の役所と測量会社の方々と少々の汗を流し、越後の銘酒も飲み、会合の後、皆でつついた「へぎそば」の味は今も忘れられない。

そうした方々とは別に、山歩きの仲間ともつながりを持った。そして、そのときの細い糸は今もつながっている。

それは、中縮尺地形図の修正に関連して始まった。私達が担当する北陸４県は、山岳地が多くを占めていたが、管内をくまなく調査し、維持していく力は無かった。勢い、市街地とその周辺に力を集中することになる。しかし、この地方の特色を発揮しなければならないと考えた私達は、長いスパンながら現地調査に計画的な登山道調査を盛り込むことと、地元山岳会の

協力を得ることを企てた。

各地の山岳会にあたりをつけ、地形図を送り、内容の不備を指摘いただく、あるいは資料などの情報を提供していただくことにした。

そのときの新潟県の担当者が A さんであった。A さんとは、その後は手紙のやり取りだけで、お会いしていないのだが、転勤先の名古屋やつくば、九州まで魚沼産のコシヒカリや銘酒が届けられた。私からは、地図作りの僅かな情報が送られるだけだから、A さんとしては割の合わないことである。

そんなきっかけで、知り合った A さんから当時、山岳会の納会にお呼ばれした。

「A でーす！　やまおかさーん！　山男達に、何かお話してくれませんか（もっとも、参加してみると“男女”であったが）」と、例の語尾に独特のイントネーションのある越後弁で頼まれた。

安請け合いした“やまちゃん”は、確か「（地図における）山の高さ」といったようなうテーマを持って、会場とした「米山」の麓にある公民館に向かった。

時雨模様の日暮れの駅頭につくと A さんともう一人、「寒い中、お疲れさんでーす！」と暖かい声で迎えてくれた。

すぐに、駅前食堂に連れ込まれ、「まだ、時間がありますから、体を温めてくださーい！」といって、越の名前がつく地酒を数杯振舞われた。それでは、そろそろ会場に向かいましょうかと声をかけられたころには、日もとっぷりと暮れて、下戸に近い“やまちゃん”、講演が気になりながらも、すっかり上機嫌になっていた。

会場の公民館、その体育館風の広がりには、山岳会の男女がマットや寝袋を脇に三々五々集まっていた。中には、簡易コンロで煮炊きするものも見えた（不謹慎ながら、この風景と体育館などに見える被災者のそれが、今回ダブって思い出されたのだ）。

ともかく、ここでもワンカップを進められ、その中で、「先生がつきました・・・。」となり、講演が始まったのである（このときのお話ほど旨くいったことはないと、“やまちゃん”は信じている。が、実は酒の勢いに助けられたのであって、「浴場の中の歌唱」といったところだろう）。

というのが、越後の山男との、そしてAさんとの付き合いのきっかけである。もちろん、地形図維持への貴重な情報は、少なくても私が富山を去るまでは届けられ、地図つくりに役立てられた。

ここに至るまで、雪に埋まったAさんの家を訪ねた時に歓待されたことと、各地に転勤しても届けられた越後の美味だけしか思い出していなかった自分に恥じながら、今、Aさんのお宅と家族の無事を祈っている。

「黄昏色染まってしまう地図」

“やまちゃん”中学生のころ、今で言うところの部活であるクラブ活動に、「どれか一つに入るように」と先生に言われた。文化系には得意なものはない、運動系はさらに苦手にしていた“やまちゃん”が、渋々参加したのが「写真クラブ」であった。なぜ、これを選んだかといわれても困るのだが、写真を撮ってみたい、カメラに触ってみたいといったことだったかもしれない。

そこで、部担当の先生が最初に言ったのが、「カメラを持っているものは？」という言葉。

手を上げられなかったのは、“やまちゃん”だけ。しかも、件の先生からは、そのことで、その後何のフォローも無かった。

それっきり、この部も含めクラブ活動というものには、足を向けないで学校生活を送った。

今なら信じられないのだが、そのことで何も言われなかった。そうした先生や生徒がたくさんいたのだろうか。

ともかく、このようなことをきっかけにしてだろうか、根っからだろうか、“やまちゃん”同好の士などといった群れにいることが嫌いになった。

そのせいではないだろうが、「根っから」を証明するように、「斜に構えている」とか、「渦中にいない」とか、「考え方がネガティブだ」などと言われることが多い。

それでも、年を経た最近のこと「測量標石で遊ぶ会」などという、ネット主体のグループに知識の要？として参加している。

常人には理解しがたいことだが、その会では陸地測量部、国土地理院にまつわるものに限らない測量標石（ほとんど用済みになっていて、史跡としてしか価値の無いもの）、それこそ伊能忠敬以前であっても良い、明治期なら内務省や工部省といった組織が測量し、設置した日本各地の測量標石を探索し、その標石の曰く謂れ調べようという集まりである。同好の士は20人あまり、年に2度ほどのオフには、10名程度が集まる。

言い訳がましいのだが、会についてさらに説明しておくと、地図作成者は業績を地図として残しているが、測量者はというと考えてしまう。伊能忠敬も測量者としては、緯度1度の長さや各地の緯度を残してはいるが一般に知られるほどのことはない。彼が測量に際して埋めた標石・杭が残っていれば立派な史跡になるはずである（関連したものは、釜石市にある）。測量日記には「印杭」なるものを設置したとあるが、残念ながら、これは残存するはずもない木杭らしい。

そうした測量者の小さな残滓に光を与えてあげようというものである。

さて、“やまちゃん”が参加するもう一つの集団は、「黄昏隆盛軍」なるもの。名は体を現しているのだろうか。明確に口述される会則によれば、「1945年8月15日以前に生まれた某社々員」を会員としている酒を飲み交わすだけの集まり。これも総勢は20人ばかりだが、次第に元社員が増えて、会則はまもなく「・・・・に生まれた元社員」となり、周りからは、「（すでに水平線に沈んだ）用済みの者、かつて隆盛

だった者の群」などと言われる日も近い。

そのほかで、“やまちゃん”が参加する集団は、ごく小さくなって、数人規模になる。

一つはここ10年以上も続く、会食仲間である。それこそ、会則も名称もない男女混合の集まりで、機会があれば食事をするだけのこと。

その他にもこれに類するものはいくつかあって、いずれもなんとなく“やまちゃん”自身が中心にいるようではあるが、大した目的もなく集合する、単に気が許せる会食の場である。

そこでのメンバーは、“やまちゃん”から見ればいずれも先の永い人ばかり。地図のことでは、「季節感が感じられる地図」、「時間の流れが表現された地図」がほしいなどといっているのだが。

まわりは黄昏に価値を認めているとはいえ、“やまちゃん”、がいることで、これらの集まりが、黄昏色に染まらないようにと気使いしながら参加しているつもりなのだが！、傍からはどうだろうか。

「よみがえれ山古志村」

“やまちゃん”の机の周りには、書棚があって、その一角は文書整理箱といったものが占めている。

その箱の大分は、ライフワークともいえる、地図測量史跡の関連文書やコピーが整理されている。その外枠には「stone」「完了資料」「未整理」といった書かれた整理箱も見える。

未整理の箱の中には、「地図から消えた町の思い出」といったテーマの紙袋がかなり前から入っていて、“やまちゃん”には、そのことが気になっている。

その袋から書き上げたいと思っている物語は、“やまちゃん”のふるさとから始まるだろうと思っている。

その谷あいの小さな炭鉱町は、今では往時の面影の一片も残されていないのではないかというぐらい、すっかり寂れている。

狭い谷間を蛇行する小さな川は、常に茶褐色のまま、石狩川に注ぎ、並行するように坂を下るどこまでも連結された貨物列車には、黒いダイヤがびっしりと詰まれ港へ進む。祭りには、うなぎの寝床状の底にへばりついた小さな市街地に人々があふれていた風景はもうない。もちろん地図の中でも、それは読み取れない。

高度成長期を経て、地図には新しい町や道路が書き加えられる中で、そうした地図から消されたいくつかの町、自らの手で消してきた町について書きとめてみたいと思っている。

それは、ダムに沈んだ町、自然災害で消えた集落、都市化で消えた下町といったものである。

そうした思いの中で、今回の新潟県中越地震のニュースに触れて思い出したことがあった。

それは、山古志村で育てられていた錦鯉をヘリコプターで救出する映像であり、国土地理院が航空写真から得た被災状況を把握し、地図化した資料に見えた山古志村の風景である。

昭和 55 年ごろ、この地を管轄する国土地理院の出先にあった“やまちゃん”山古志村を含むこの地域の地図修正図化を担当した。

山間地では、休耕田と化した沢の奥深くまで続く水田記号を削り取った。そして、山古志村周辺では、かつての水田を錦鯉の池に書き換えた。新しい地図には、数え切れないくらい沢山の池が出現したが、果たしてそんなに多くの池があるのか、現地を見ていない“やまちゃん”（現地の調査は他の者が担当した）疑問に思いながらも、作業を続けたものだった。

池の散在するニュース映像を見ながら、地図作成者はそんな昔のことを思い浮かべていた。

今回の地震に負けずに、この町は蘇るのであろうか。「地図から消えた町」にならないことを心から願っている。